

「侍ジャパン」WBC 悲願の優勝！

23.04.01 守山裕次郎

2023WBC (ワールド・ベースボール・クラシック) が開催され、「侍ジャパン」が見事優勝した。今大会で印象に残るシーンは数々あったが、中でも準決勝の対メキシコ戦、決勝の対米国戦は特筆で、信じられないような素晴らしいドラマが展開された。

準決勝の対メキシコ戦、それまで絶不調の「昨年セリーグ三冠王・村上選手」に9回裏「逆転サヨナラ2塁打」が飛び出し、米国との決勝戦では最終回、1点差を大谷投手が見事締めくくり優勝したが、まるで夢の中でドラマを見ているような二日間だった。連日手に汗握って一喜一憂、改めて野球の楽しさ、素晴らしさ、奥の深さを実感した。

東京ドームで始まった1次予選から、連日テレビ中継の視聴率は40%を超える盛り上がりで、ドーム球場も以前のように鳴り物や大声での応援が解禁され、コロナ禍の3年間の自粛生活で溜まった鬱憤を、一挙に晴らすことができた最高の大会となった。

ドラマチックな「侍ジャパン」の活躍だったが、東京ドームでの予選リーグと準々決勝、マイアミに移動しての準決勝、決勝までの感動の2週間を以下に振り返ってみた。

1. 予選リーグ及び準々決勝 (東京ドーム)

1) 対中国：3月9日 (木)：スコア 8-1：投手リレー：大谷、戸郷、湯浅、伊藤

予選リーグ最弱の中国だったが、初回の日本は連続四球の押し出しで1点を貰っただけ、その後も3回までは拙攻が続き、さすがに初戦の緊張感に苦しんでいる様子だった。

4回に大谷のタイムリー2塁打が出て、2点を追加してからは安心して観戦できた。

2) 対韓国：3月10日 (金)：スコア 13-4

投手リレー：ダルビッシュ、今永、宇田川、松井、高橋宏

予選リーグ最大の難敵で結果だけ見れば楽勝だったが、3回表に2点本塁打、加えてエラーも絡み韓国に3点先行された。だがその裏、日本が4点入れて逆転、その後は日本ペースとなり、終わってみれば13-4の大差、あと1点でワールド勝ちだった。

3) 対チェコ：3月11日 (土)：スコア 10-2：投手リレー：佐々木、宇田川、宮城

チェコは1回表、2アウトから佐々木投手の剛速球を2塁打した。次打者を遊撃ゴロに打ち取ったものの、送球エラーで1点先取された。日本は3回裏3点入れて波に乗り、10-2の大勝となった。(チェコ選手は全員アマチュアで、皆何かの職業を持っている)
※この試合4回表、チェコのエスカラ選手が佐々木投手の剛速球を足に受け、悶絶した。

しばらく横たわっていて心配されたが、元気に起き上がり1塁付近からライト方向へ全力疾走を試み、元気さをアピールする姿に満員の観客から万雷の拍手が送られた。

4) 対オーストラリア：3月12日 (日)：スコア 7-1

投手リレー：山本、高橋奎、大勢、湯浅、高橋宏

初回、大谷選手による右翼席後方の看板(自分自身の)直撃の3点ホームランで波に乗り、その後追加点を重ね圧勝した。(これで1次予選全勝、1位通過)

5) 対イタリア (準々決勝) : 3月16日 (木) : スコア 9-3

投手リレー : 大谷、伊藤、今永、ダルビッシュ、大勢

- ・この準々決勝以降はトーナメント形式で負ければそこで終わり。1次予選チームと違い、メンバーの大半がメジャーやマイナーに所属しており、決して侮れないチームだった。
 - ・1回表、先発大谷は1安打されたが三振も取り、まずまずのスタート。その裏ノーアウト1塁、2塁のチャンスを3番大谷以下が生かせず無得点、何となくいやな流れだった。
 - ・2回表、大谷は最速164キロで2三振を奪った。3回裏、大谷の頭脳的バントヒットをきっかけに1点取り、その後岡本に3点ホームランが飛び出し、一挙4点を奪った。
 - ・5回表、それまで全力投球の大谷が突然乱れ出し、デッドボール2個とヒットで2死満塁、次打者にもヒットを打たれ2点取られて降板。伊藤投手に交代、後続は抑えた。
 - ・その裏、村上と岡本にタイムリーが出て3点を追加、7-2となった。
 - ・7回裏、吉田のソロホームランと源田のタイムリーヒットで2点追加、ダルビッシュが8回表ソロホームランを許したが、9-3で勝利した。
- ただし、ヒットの数は双方8本ずつだった。大差になったのは「侍ジャパン」はピンチを凌ぎ、逆にチャンスは生かしたことにあり、それがチームの実力差なのだろう。

2. 準決勝及び決勝 (ローンデポ・パーク : 米国マイアミ)

1) 対メキシコ (準決勝) : 日本時間3月21日 (火) : スコア 6-5 (9回逆転サヨナラ勝ち)

投手リレー : 佐々木、山本、湯浅、大勢

- ・1回表、佐々木投手が二者三振、その裏サンドバル投手(大谷の同僚)が三者三振とする。
 - ・4回表、2アウト1、2塁でウリアスが佐々木からホームラン、メキシコが3点先制。
 - ・4回裏、2アウト1、3塁のチャンスに村上が見逃し三振。(嫌な流れ)
 - ・5回裏、2アウト満塁のチャンスに近藤がレフトフライ。(嫌な流れ)
 - ・6回裏、同じく2アウト満塁のチャンスに源田がレフトフライ。(嫌な流れ)
 - ・7回表、1アウト1塁で三振、盗塁失敗。ただし、盗塁したランナーは源田のタッチをかいくぐりセーフ判定だったが、チャレンジしてビデオ判定の結果、走者がベースから僅か(1mm?)離れた瞬間のタッチがあった。(サッカー三苦と同様、源田の1mm!)
- ※この判定は重大で、仮にセーフで次打者に追加点を取られたなら、敗戦は確実だった。
- ・7回裏、2アウト1、2塁、吉田が難しい内角球をライトポール際へホームラン、同点!
 - ・8回表、タイムリー2塁打とヒットで2点追加された。ただし3点目は本塁上で阻止。
 - ・8回裏、1アウト2、3塁、代打山川のレフトフライで1点返す。(4-5)
 - ・9回裏、先頭の大谷が2塁打を放ち、吉田の四球でノーアウト1、2塁。次の村上はそれまで三振、三振、三振、内野フライの大不振だったが、見事センターオーバーの2塁打を放ち、吉田の代走周東の快足で「逆転サヨナラ勝ち!」の見事なドラマとなった。
- 2) 対米国 (決勝) : 日本時間3月22日 (水) : スコア 3-2で優勝!!!
- 投手リレー : 今永、戸郷、高橋宏、伊藤、大勢、ダルビッシュ、大谷
- ・1回表、米国の主砲トラウト(大谷の同僚でキャプテン)に2塁打されたが後続を抑えた。

- ・ 2 回表、ターナーのレフトへのソロホームランで米国が 1 点先制。
- ・ 2 回裏、村上のライトスタンド上段への特大ホームランで同点。その後 1 アウト満塁からヌートバーの 1 塁ゴロの間に 1 点追加し 2-1。
- ・ 4 回裏、岡本が左中間にソロホームランを放ち 3-1 でリード。
- ・ 5 回表、20 歳の高橋宏が上位打線にヒット 2 本を打たれたが、三振 2 つを取り無得点。
- ・ 6 回裏、2 死から 3 つの四球を選び満塁としたが無得点。
- ・ 7 回表、大勢が四球とヒットでノーアウト 1、2 塁になったが、トラウトをライトフライ、ゴールドシュミットをショートゴロ併殺に打ち取り無得点。
- ・ 8 回表、ダルビッシュが強打者シュワーバーにライト上段にホームランを打たれ、3-2。
- ・ 9 回表、DH から抑えに回った大谷は先頭打者に四球を与えたが、強打者の 1 番ベッツをセカンドゴロ・ダブルプレーでツーアウト、次の強打者トラウトを 3-2 のフルカウントから、渾身のスライダーで空振り三振に討ち取り、「悲願の優勝!!!」となった。

3. 今回並びに過去の大会を振り返り、様々思ったこと、感じたこと

1) 栗山監督と大谷選手の出会いと二刀流への挑戦の経緯

- ・ 大谷選手は花巻東高校卒業後のメジャー入り希望を表明していた。その結果、どの球団もドラフト会議で彼を指名しなかった中、唯一日本ハムだけが彼を強行指名した。
- ・ 環境の異なるメジャーで、日本の高卒ルーキーに投打二刀流を許す球団はないと思われ、栗山監督の下で二刀流にチャレンジしたら・・・との説得が功を奏し日本ハムに入団した。
- ・ 栗山監督指導の下、5 年間二刀流での実績を積み、その後エンゼルスへ移籍してメジャーでの二刀流を年々進化させ、昨年遂にベブルース以来のスーパースターに成長した。

2) ダルビッシュとヌートバーの参加

- ・ 2009 年第 2 回 WBC の優勝決定戦 (対韓国)、延長 10 回表、それまで不調のイチロー選手が 2 アウト 2、3 塁でセンター前ヒットを打って勝ち越し、その裏ダルビッシュが見事抑えて優勝した。この時のストレスでイチローは胃潰瘍を患い、開幕を欠場した。
- ・ この時はイチロー中心の「侍ジャパン」だったが、今回その役割を担ったのがダルビッシュだった。メジャーで唯一彼だけが宮崎合宿の初日から参加、後輩達に様々な情報を伝える役割も果たしていた。かつてのイチローもそうだったように、日本を離れてみて初めて、日本人としてのアイデンティティーを強烈に感じるようになった結果だろう。
※かつては人を寄せ付けない雰囲気のあるダルビッシュだったが、人間的に大きく成長した。
- ・ 母親が埼玉県出身のヌートバー選手の参加も大きかった。それまで全く無名選手だったが皆に好かれる明るい性格で、「ペッパーミル・パフォーマンス」と共に攻守に大活躍、「ニッポンダイスキ、ミンナアリガトー！」と一躍人気者になってしまった。

3) 佐々木投手の対チェコ戦 3.11 先発登板の因縁、与えたデッドボールへの対応

- ・ 1 次リーグ 3 月 11 日の対チェコ戦に佐々木投手が先発した。奇しくも 12 年前のこの日、9 歳だった彼は岩手県陸前高田で家を津波に流され、祖父母と父親を亡くした。その少年が大きく成長し「侍ジャパン」の一員になり、160km 超の剛速球を投げる雄姿を、亡き

3人は天国から頼もしく見守ってくれていたことだろう。

- ・その対チェコ戦で、佐々木投手はエスカラ選手の足にデッドボールを与えてしまった。大事には至らなかったが、翌朝チェコチームが滞在するホテルを尋ね、2つの袋一杯に入ったお菓子類（ロッテ製）をエスカラ選手に直接手渡した。彼のこの紳士的な行為にチェコ選手団一同大いに感激し、チェコ国内でも大きな反響があったそうである。

4) 「侍ジャパン」の選手たちと観客のマナー

- ・結果的に1次予選を含め7勝0敗だったが、勝利後に全選手が1列に並び、負けた相手チームの健闘にも敬意を払う姿は、各国チームや海外メディアから賞賛された。
 - ・マイアミでの準決勝、決勝戦での日本ベンチの床にゴミはほとんどなく、ゴミだらけが当たり前のMLBベンチに慣れている人たちには大変な驚きだったようである。
 - ・対オーストラリア戦、大谷選手が右翼上段の自分の看板を直撃するホームランを打った。そのホームランボールを若い女性が拾い、手渡しで周囲の人たちにも回して皆で喜びを共有していたが、ボールの争奪戦になる米国ではあり得ない出来事だったようである。
- 5) 米国との決勝戦を前にして、ロッカールームでのチームメイトへの大谷選手の言葉：
米国代表に憧れるのは止めましょう。憧れてしまったら超えられない。今日の僕たちは超えるために来た。トップになるために来た。今日一日だけは彼らへの憧れを捨てて、勝つことだけを考えていきましょう。さあ行こう！（メジャーで自信を得た言葉）

4. WBCが終わっての感想

- ・栗山監督とコーチ陣、実質的キャプテンのダルビッシュ、二刀流で軸の大谷、日本語が分からないが前向きで明るいヌートバー、今年からメジャーへ挑戦の吉田、準決勝の後半まで打撃不振に悩んだ村上、多くの若手投手陣、更に水原一平通訳も含めチーム一丸となり、すべてが上手くかみ合っただけの優勝で、感動もそれだけに大きかった。
- ・日米共に先日開幕した。吉田、藤波、千賀が新たにメジャーに加入、彼らも含め日本人選手の活躍が大変楽しみである。そして日本のプロ野球レベルも高いことが証明されたので、こちらにも目配りしながら「筋書きのないドラマ」を今年も大いに楽しみたい。

5. 最後に

今回のWBCが日本人に与えたプラスの効果は実に大きかった。単に経済効果だけでなく、コロナ禍で疲弊した多くの国民のメンタル面の活性化効果は計り知れない。

そして野球というスポーツが、多くの日本人に愛されていることを改めて実感した。

本日4月1日、甲子園球場では「春の選抜高校野球」の決勝戦が行われ、山梨学院が報徳学園を7-3で下し、山梨県勢として春・夏を通じ初の優勝を遂げた。

少子化の影響もあり、年々野球少年の数が減少しているそうだが、今回のWBCでの感動をきっかけに、多くの少年達には野球を始めてもらいたい。「夢は甲子園」をモットーに、更にはメジャーリーガーを目指すことも決して夢でない。何しろベブルースを超える日本人選手が出現したのだから・・・

以上